



# 二つの愛

---

---

karinomaki

---

## 奈美子

---

奈美子という、変わった女性の、二つの恋について。

奈美子は30才。恋愛経験値0。でも、この年で大恋愛をしました。一つは破れ、一つは死ぬまで実りません。しかし、奈美子は自分を世界一幸せだと何度も思うのです。その訳は、読んで下さればわかっていただけるでしょう。

## 副社長

---

奈美子は合コンで、ある会社の副社長と出会いました。奈美子も、その人も、恋人がいるのに無理に人数合わせで出た合コンでした。

奈美子は最初、その人に特に何も感じませんでした。でも、副社長に名刺を渡されたとき、ドキドキしたのです。

この人は社長の器なんだわと、奈美子は思いました。便宜上副社長をしている。その方が何らかの得策があるからだと思直感で思ったのです。

不覚にも、奈美子はその生き方をカッコいいと思ってしまいました。奈美子は言いました。「私、彼氏いるけど別れますね。あなたに魅かれたから。魅かれたってわかります？」

「魅力的って意味ですね。勝手にしたら？」

副社長はそっけなく言いました。

## 恋愛経験値0

---

奈美子には彼がいました。しかし、恋愛経験値0。

どうしてかというと、奈美子の彼氏は、奈美子が空想で作上げた人だったのです。奈美子は精神病患者だったのです！！

しかし、奈美子はずっと幸せでした。ただ、奈美子はうそをついてしまいました。奈美子は空想の彼と別れる気などなかったのです。

## 訪問

---

奈美子はある日突然、ガラス張りの一階の窓に、副社長の姿を見ました。

「どうしたんですか？そんなにやつれて。」

奈美子がびっくりするほど、副社長は疲れが顔ににじんでいました。

「実はね、この前、お寺に一人で行きました。そしたらわけがわからなくなったんです。どうしてか、涙が止まらないのですよ。奈美子さん、あなたは僕に何か隠しているでしょう。それがわかったとたん、君の背負っている何かが重いんですよね。でも、何もできませんよ。僕は決して別れない。あのひとと。あのひとは僕の子供がお腹にいるんですよ。でも、はっきり言いますと、僕にはあのひとも、奈美子さんの苦しみも、重いだけです。何にもできないことを思い知らされるからね。」

## 隣に住んで下さい

---

じゃあ、こうしましょう。私があなただの恋人に会ってみます。きっと素晴らしいかたです。あなたが選んだのですから。私は、これであなたへの思いは終わりにできそうです。だから、あなたの好きな人に会っても、大丈夫ですよ。ただ、一つ提案があります。隣の家、めちゃくちゃ安く売りに出されているんですよ。もしよかったら引っ越してこられませんか？

あなたの苦しみだけは、私は我慢できないです。

実は、こんな声がしています。「奈美子、パパだよ。生きて戻ってきたよ。おまえの隣にいたい。」

あなたは、パパなんでしょう？

なんでわかるんです？

---

副社長は言いました。その目は輝いていました。

なんでわかるんです？僕は今日、それを言いに来たのですよ。

僕があなたの父親かどうかはそりゃわかりませんよ。でも、寺から帰るとき。見えたんですよ。

僕と同じような眼鏡をかけた年配の人が。

僕に、そして奈美子さんに目がそっくりでした。

## 結婚

---

副社長は結婚と同時に隣に越してきました。

私は、副社長を「パパ」だと思っていたのですが・・・

ある時、奥さんに言われたのです。

「私はこの結婚は失敗だと思っています。あのひとの心はうつろなんです。自分中心のひとでしかありません。家庭をかえりみないひどいひとですよ。」

## 崩れる心

---

その日を境に、奈美子の精神病は日に日に重くなっていきました。

「どうしてですか？奥さん？」と聞きたいのに聞けない。  
どうして失敗した結婚にしがみつくなのか、子供のいない奈美子には全く理解できません。

聞いてはいけない、責めてはいけない・・・と思ううちに。

奈美子のあの気持ちが復活してしまいました。

それは、まぎれもなく、恋でした。

心の狂った奈美子は、一晩中副社長にメールを送り続けました。理解不能な、聞こえてくる声のメール。それが奥さんにばれたとき、奈美子は病院送りになりました。

## 手紙

---

奈美子は、病院で薬である程度安定し、奥さんと副社長に手紙を書きました。奥さんには、「副社長が好きでした。申し訳ありません」とだけ書き、副社長には、病院の名前を書きました。奈美子はずるかったのですね。副社長に面会に来てほしかったのです。しかし、奥さんは、奈美子の主治医の先生に、その二通を見せにきたそうです。

先生は何も言いませんでしたが、奈美子はそれを母親から聞かされ、母親に「なんてことをしたの？あなたはずっとそこにいたほうがまし。」と言われました。

奈美子は泣き暮らしました。

## 先生

---

そんな奈美子を、先生は3か月、病棟にほぼ閉じ込めました。奈美子は外に出たくて仕方がないのですが、先生は決して許してくれませんでした。

3か月のち、奈美子の頭の中に、ショパンの別れの曲が流れ出し、奈美子は部屋で泣き叫びました。もう二度と家に帰れない、何故なら、私が全てこわしたから……。

先生の言葉を思い出しました。「君は言い訳ばかりだ。自分が悪かったとは一つも思えないのか？」先生、私が悪いの？隣にあのひとが住むことは、パパの指令だったけど、あれを仕組んだのは、私なのかな？

奈美子は初めて思いました。指令や、病気のせいにはいけないと。先生の言った意味がやっとわかり、奈美子は落ち着いてきました。そして、院内単独外出を許可されました。

(ここで、打ち明けます。この話は史実に基づいてフィクションを入れて書いた、私のお話です。言い訳になりますが、副社長が隣に住んだのは、偶然です。そして告白。手紙がきれいな先生へ。指令に逆らうこと、自分の足で立って生きることを、薬とは違う生の治療で教えて下さった先生が好きです。)

## 先生はパパに似ている

---

奈美子は先生に言いました。「先生はパパに似ている・・・。」

奈美子の父もまた、医師でした。奈美子は先生が好きになっていました。

やがて退院し、先生に会うことが少なくなりましたが、奈美子はこう思えてなりません。副社長への気持ちは終わり、先生へ引き継がれた。つらかった恋。隣に住んで下さいなどと、本当におかしなことだった。パパ、私をだましたね？副社長とのことは、先生を好きになるためにパパが仕組んだのでしょうか？

奈美子の心は自由です。先生にも家庭があるから私は結婚しません。でも。パパがいることだけはわかっています。もしかしたら、幻覚の、空想の恋人は、最初から先生だったのかもしれないね。全てのことはつながっているから・・・。